母の言葉胸に高校へ

陸前高田の佐々木君

自宅が被災、転入も

「いつも前向きに明るく」

高田高に合格し同級生たちと喜ぶ佐々木謙太郎君（左から3人目）。被災しながらも「前向きに明るく生きたい」と決意する＝22日午後3時15分、大船渡市・大船渡高

陸前高田・一中3年の佐々木謙太郎君は掲示板に目をやり、ほっとした表情で友人のところに向かった。大船渡市猪川町の大船渡高で22日行われた高田高の合格発表。地元の志望校を目指してつかんだ合格だが、自宅は津波で流され、父謙一さんの仕事場のある一関市千厩町の千厩高に転入を考えている。大震災は15歳が思い描いた高校生活を一転させたが、行方不明の母美公さん(47)の「いつでも前向きに明るく生きなさい」という言葉を胸に新たな一歩を踏み出す。

「受験番号は3035」。掲示板には番号ではなく「全員合格」という文字が書かれていたが、津波で受験票を流されてもずっと忘れられなかった。試験中、「受かればいいな」と念じてずっと見つめていた番号だ。

9日の試験中に大きな地震が襲ったとき、試験官が「ここは津波の避難場所になっています」と説明した学校は今は見る影もない。

陸前高田市高田町にあった自宅は「跡形もなかった」。母親の行方も分からず、謙一さんや親戚と捜して回った。今は謙一さんが経営する会社のある一関市千厩町で生活。地元の高田高進学から千厩高への転入を考えている。

佐々木君の目は真っすぐ前を向いている。震災直後、「何も考えられなかった」自分を変えたのは「どんなときも明るく生きなさい」という母の言葉だった。

「昨日までそばにいた人が消えるのはつらいけど、もう後戻りできない。自分より大変な被災者もいる。母が残してくれたこと、掛けてくれた言葉を胸に人を元気づけていきたいから」

高校では軽音楽部に入ろうと思っている。自分を励ましてくれる音楽を自分でも作ってみたいという。父の知人が譲ってくれた木製のエレキギターは携帯電話の待ち受け画面にするほどの宝物だ。

「母はどこで見ているか分からないけど、きっとどこかで見てくれている。自分が成長する姿を見せたい。そしていつか高田に戻って、高田を復活させたい」

歯科医療チーム派遣

岩手医大のセンター

訪問で啓発活動

「阪神」の経験生かす

「阪神大震災の経験を受け継ぎ、最善の活動をしてきたい」と意気込む成石浩司准教授（左）と城茂治センター長

岩手医大歯科医療センター（城茂治センター長）は県歯科医師会と連携して、歯科医療チームを被災地に派遣する。

歯科医療チームは歯科医師2人、歯科衛生士、歯科技工士の4人1チーム、計8チーム。燃油が準備でき次第、移動診療車を使い沿岸部の避難所を回る。

チームには岡山県で阪神大震災を経験した成石浩司准教授がいる。東日本大震災後すぐに岡山大の歯科医療チームで診療に当たった教授と連絡を取り、当時の情報やデータを入手した。

阪神大震災の発生は朝だったが、今回はちょうど家族がそれぞれ活動している時間帯。成石准教授は「家族が離れ離れになり、よりストレスを感じやすい環境である」と指摘し、「阪神大震災の経験を受け継ぎ、最善の活動をしてきたい」と意気込む。

阪神大震災の時は、被災直後は緊張で感じていなかった歯痛が1週間をすぎたころから多発したという。歯は栄養バランスやストレスの影響を最も受けやすい。食べられなくなれば、免疫力の低下を招き、インフルエンザなど感染症を引き起こす可能性もある。

また被災地では過度のストレスや寒さで、無意識に上下の歯をかみしめる「食いしばり」が多くなりがちだ。

チームは予防策として▽上下の歯をかみしめない▽顔面のマッサージを行い、抗菌作用のある唾液の分泌を促す―の2点の実践を勧める。

城センター長は「できるだけ早い段階で予防すれば1、2カ月後に増える歯科疾患を抑制できる。被災を免れた診療所があればそこを受診し、チームが回っていれば受診してほしい」と呼び掛ける。

感染症の予防啓発や訪問診療で被災地で暮らす人々をサポートする。

歯科医療チームは歯科医師2人、歯科技工士1人1チーム。燃油が準備でき次第、移動診療車を使い沿岸部の避難所を回る。

チームには岡山県で阪神大震災を経験した成石浩司准教授がいる。東日本大震災後すぐに岡山大の歯科医療チームで診療に当たった教授と連絡を取り、当時の情報やデータを入手した。

阪神大震災の発生は朝だったが、今回はちょうど家族がそれぞれ活動している時間帯。成石准教授は「家族が離れ離れになり、よりストレスを感じやすい環境である」と指摘し、「阪神大震災の経験を受け継ぎ、最善の活動をしてきたい」と意気込む。

阪神大震災の時は、被災直後は緊張で感じていなかった歯痛が1週間をすぎたころから多発したという。歯は栄養バランスやストレスの影響を最も受けやすい。食べられなくなれば、免疫力の低下を招き、インフルエンザなど感染症を引き起こす可能性もある。

また被災地では過度のストレスや寒さで、無意識に上下の歯をかみしめる「食いしばり」が多くなりがちだ。

チームは予防策として▽上下の歯をかみしめない▽顔面のマッサージを行い、抗菌作用のある唾液の分泌を促す―の2点の実践を勧める。

城センター長は「できるだけ早い段階で予防すれば1、2カ月後に増える歯科疾患を抑制できる。被災を免れた診療所があればそこを受診し、チームが回っていれば受診してほしい」と呼び掛ける。

実習船の生徒帰郷

ハワイ沖から空路、陸路で

県の共同実習船「りあす丸」に乗り込み、ハワイ沖でマグロはえ縄漁実習を行っていた宮古水産高の生徒らは22日、宮古市などに帰郷した。家族との再会を喜びつつも、津波で姿を変えた古里の姿に驚きを受けていた。

りあす丸には宮古水産高専攻科8人、同校海洋技術科2年の13人、久慈東高総合学科の2年生4人の計25人が乗船。地震当日の11日は、日本から東方1400～1500キロの公海上を航行中だった。津波を受けて宮古港帰港を断念し、静岡県の焼津港に14日入港した。以来、同港で船内待機し、メールなどで家族と安否に関する連絡を取り合っていた。

生徒は空路と陸路で本県入り。宮古水産高では、保護者らが出迎えた。同校海洋技術科の宮本将臣君は母親の奈美さん、祖母畠山良子さん(62)と約2カ月ぶりに再会。畠山さんは「会えてとてもうれしい。皆さんにお世話になって大きくなって帰ってきた」と喜んだ。

震災後、初めて見る古里はがれきが散乱し、宮本君は「宮古をずっと心配していた。想像以上の被害にびっくりした」と気を落としていた。

津波を乗り越え、再会を喜ぶ岩田英子さんとハチ

愛犬 11日ぶり再会

宮古の岩田さん「力が湧いてくる」

「おかえり、ハチ」。宮古市内で衰弱していたところを動物病院に保護されたシバイヌが22日、飼い主に引き取られた。津波にのまれたが何とか生き延び、11日ぶりの再会。家が流失してしまった家族に元気を与えている。

シバイヌは、宮古市鍬ケ崎下町の市職員岩田直司さん(53)の飼い犬ハチ（13歳、雄）。

自宅で岩田さんの母英子さん(83)と一緒にいたところ地震が発生。英子さんは必死にハチを引っ張って逃げたが、津波に追いつかれた。英子さんは近くの金網につかまって難を逃れたが、ハチは首輪が抜けて波の中に見えなくなったという。

その後、岩田さんら家族はハチを捜し続けたが見つからなかった。しかし22日、岩手日報でハチが動物病院に保護されたことを知り、すぐに引き取った。

岩田さんは「最近は体調を崩すことも増えていたので、半ば駄目かと思っていた。本当に頑張ってくれた」と胸をなで下ろす。

再会を一番喜んだのは英子さん。岩田さんは親戚のつてで新たな借家に入居できたが、日中に一人でいるとハチを思い出し、さみしさが募っていた。

英子さんは「もう最高の喜び。津波で財産が裸になっても、ハチがいてくれれば力が湧いてくる」と、愛犬を強く抱きしめる。

首輪のある犬 大船渡で救出

津波で大きな被害を受けた大船渡市大船渡町のがれきの中から22日、犬が救出された。首輪があることから飼い犬とみられ、11日の震災以降、閉じ込められていた可能性が高いという。

同日の捜索活動終了直前の午後4時ごろ、重機でがれき撤去作業中に発見。捕まえようとした自衛隊員2人にかみつくなど暴れたが、捕獲され、大船渡保健所が保護した。

今回の震災で同保健所が保護したペットは初めて。空腹だったらしく市職員が与えたおにぎりを3個食べた。

犬は茶色で体長約80センチ。雌とみられ、赤っぽい布製の首輪をしている。震災のため、同保健所で通常より長めに保護する予定。

がれきの中から救出された犬＝22日午後5時30分ごろ、大船渡市大船渡町

即応予備自衛官ら出発

県内から34人 生活支援に協力

所属する駐屯地行きのバスに乗り込む即応予備自衛官ら＝22日午前9時35分、滝沢村滝沢・陸上自衛隊岩手駐屯地

東日本大震災の被災地を支援するため、県内の即応予備自衛官33人と予備自衛官1人の計34人は22日、滝沢村滝沢の陸上自衛隊岩手駐屯地に集合した。災害派遣のため即応予備自衛官と予備自衛官を招集するのは初めて。同日中に所属する部隊に合流し、23日ごろから約1週間、県内はじめ東北各地の被災地で生活支援活動などに当たる。

即応予備自衛官は、現在も年30日の訓練を受けている自衛官経験のある民間人で、現場での活動が中心。年間5日の訓練を受ける予備自衛官は後方支援などを担当する。

即応予備自衛官の一人、盛岡市の高橋芳明さん(35)は、18歳から10年余り陸上自衛官として活動した経験があり、現在は同市内の飲料水の製造販売メーカーに勤務。「早く被災地に行って現地の状況を自分の目で確かめたい。希望を捨てずに、被災された方を手助けしたい」ときっぱり語った。

盛岡市中堤町の英語塾経営菅原尚さん(49)は民間出身の予備自衛官で、通訳業務を担当。「現地の米軍と自衛隊の活動を円滑に進めるために協力したい」と意気込んだ。

浄土ケ浜ビル提訴へ

宮古市 建物撤去など求める

宮古市議会は22日、臨時会を開き、市が浄土ケ浜ターミナルビル（三船博敏社長）を相手に同市日立浜町の同ビル建物撤去と土地の明け渡しなどを求め盛岡地裁に提訴する案を可決した。市は今月中に提訴する方針。

市によると、同社から昨年7月、市に対して同ビル建物を無償譲渡する申し入れがあった。市は建物の根抵当権などを抹消することを前提に譲渡を受け入れる方針を示したが、交渉がまとまらなかった。

市は今月10日付で同社との土地の賃貸借契約を解除。同社に対して建物撤去と土地の明け渡しを求めたが、応じないため、提訴に踏み切ることにした。

同社は2009年度末で土地賃借料や固定資産税の一部など計約2014万円を滞納しているという。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。